

東京の文化財

東京都教育庁地域教育支援部管理課

高島屋東京店***

目次

- 国の新指定文化財「高島屋東京店」……1・2・3
- わがまちの文化財(瑞穂町) ……………6
- 文化財ウィーク2009PR記事 ……………4
- わがまちの文化財(新島村) ……………7
- 文化財ウィーク2008表彰事業 ……………5
- 世界遺産なるか? 国立西洋美術館本館 ……8

国の指定文化財「高島屋東京店」

日本橋高島屋として親しまれている高島屋東京店が、平成21年(2009)6月30日付けで国の重要文化財(建造物)に指定されました。百貨店建築が重要文化財に指定されるのは初めてのことです。

高島屋東京店の建築概要

高島屋東京店は、昭和5年(1930)8月に着工し、昭和8年(1933)3月17日に竣工、同月20日に開店しました。設計者は公募の建築図案競技(コンペティション、略してコンペ)により選ばれた高橋貞太郎で、実施設計は片岡安、前田健二郎の協力も得てまとめられました。施工は大林組。鉄筋鉄骨コンクリート造、地上8階、地下2階。百貨店では初めての全館冷暖房完備。イタリア産の大理石をふんだんに使い、外部の窓やガラスは英米製。当時東京で三井本館(1929/重要文化財)と並んで贅を尽くした建築といわれました。その後、昭和12年(1937)に高橋貞太郎の設計で増築工事が始まりますが、戦争の影響で昭和14年(1939)に地下部分のみを作って中断。戦後、村野藤吾の設計で、昭和27年(1952)に竣工する第1次から計4回にわたる増築が行われ、昭和40年(1965)に1街区に及ぶ現在の姿になります。現在の規模は、地上8階、地下3階。鉄筋鉄骨コンクリート造。間口約65m、奥行き約115m。延床面積は77,875.107㎡です。

百貨店建築と高島屋東京店の歴史

近代都市文化と百貨店

百貨店は19世紀の中頃、フランスで誕生し欧米に広まります。日本では明治時代の末頃に呉服店が規模を拡大しながら百貨店に生まれ変わっていきました。大正時代に入ると、建物も木造から鉄骨鉄筋コンクリート造などになり、エレベータやエスカレータが設置されて近代化が進むとともに、遊園地のような屋上や屋上庭園、催し物のホールなどが造られ、日本独自の発展を遂げていきます。東京では関東大震災の復興期に多くの百貨店が増築や新築を行ないました。昭和初期、東京で初めての地下鉄として開業した銀座線沿線では、上野に松坂屋、日本橋には三越、白木屋、高島屋、銀座には松屋などの百貨店が軒を連ね、百貨店は近代都市生活の華となりました。

高島屋の歴史と日本橋へのこだわり

高島屋は、天保2年(1831)京都で創業します。東京へは明治30年(1897)に出店。大正5年(1916)、念願であった商業の中心地である日本橋の中央通りに南伝馬町店を開店します。大正12年(1923)に入り新店舗建設の検討が始めた矢先、関東大震災が発生し南伝馬町店も全焼。仮店舗での営業の一方で、復興の新店舗計画が本格化します。

新店舗の候補地選びは日本橋から銀座にかけての中央通り沿いを中心に3年にも及び、大正15年(1926)、日本生命が事務所兼百貨店ビルの建設を計画していた現在の場所に決まり、日本生命と共同で「日本生命館」の建設事業が始まりました。当初、敷地は現在の北側の一部のみでしたが、高島屋はもっと広い土地が必要と力説し、既に銀行の建設が進んでいた隣接地を加えることを強く望みます。敷地問題は、昭和4年(1929)によりやく決着し、いよいよ建設へのスタートが切られました。

東洋風デザインを求めた設計コンペ

日本生命社長^{ひろせすけたろう}弘世助太郎の「同じつくるなら最高のものを」との意見により、コンペが行われることとなりました。審査員には伊東忠太、武田五一、塚本靖、佐藤功一、片岡安と、当時を代表する建築家が名を連ねました。コンペは、日本生命と高島屋の要望を入れて、岡田信一郎が計画した建物をどのようなデザインにするかを問うもので、「東洋趣味を基調とする現代建築の創案」がポイントとなりました。390点の作品が集まり、その中から高橋貞太郎の案が選ばれました。



高橋貞太郎案**

2人の建築家

高橋貞太郎(1892~1970)は、東京帝大の建築学科を卒業後、宮内庁や復興建築助成株式会社等を経て、高島屋東京店のコンペを契機に独立。都内に残る代表的な作品としては学士会館(1928/国登録文化財)、旧前田侯爵家駒場本邸の洋館(1929/東京都指定有形文化財)などがあります。

増築を手がけた村野藤吾(1891~1984)は、早稲田大学卒業後、渡辺節建築事務所を経て、昭和4年(1929)に独立。代表作に宇部市渡辺翁記念会館(1937/重要文化財)、世界平和記念聖堂(1949/重要文化財)があり、都内でも日生劇場の入る日本生命日比谷ビル(1963)など多くの作品を見ることができます。百貨店作品も多く、代表的なものとして戦前は大阪のそごう(1936)、大丸神戸店

(1937)、戦後は名古屋の丸栄(1953)、有楽町のそごう(読売会館、1957)などがあげられます。

高島屋東京店の見所

戦前の百貨店建築の代表作

高橋の手がけた旧日本生命館部分の外観は三層構成で、基壇部の1、2階は花崗岩仕上げ、3~7階の中間部分はタイル仕上げで柱の間を3分割した窓が整然と並び、頂部の8階は上下に大きく



高島屋東京店外観*

張り出し、装飾のついた柱の間に半円形の窓を3つならべます。入口には装飾的なバルコニーや持送を備えます。細部を見るとコンペで求められた東洋風のデザインがちりばめられ、壁の石には鍔金物風の浮彫り、軒下には垂木形が見られます。

中央通りから入ると、地下への大階段と格天井が印象的な2層の吹き抜けのホール。シャンデリアや手摺の金物は残念ながら戦時中に取りはずされましたが、柱や壁の大理石、柱上部や梁の石膏彫刻などが創建時の姿を伝えます。また独特の空調方式である柱巻きダクトも残っています。正面奥のエレベータは、籠などの一部は当初のものが再塗装されて大事に使われています。金色に輝く安全柵やオペレータによる手動運転も健在です。

屋上のエレベータ

ホールは、柱に梁、長押に釘隠し、格天井という木造建築の要素が石と漆喰によって再現された不思議な空間になっています。屋上は、円形の噴水のある洋風庭園、前田健二郎の設計による七福神を祭った七福殿が鎮座する和風庭園などが



1、2階吹き抜け*

創建時の姿をとどめています。



屋上階のエレベータホール*

増築の妙

歴史のある百貨店建築は、戦災や火災を受け、また店舗規模の拡大にあわせ何度も増築が行われることで原型が失われていることが多いのですが、幸いなことに、高島屋東京店は戦災、火災にあうことなく、また創建時の日本生命館にはほとんど手をつけることなく東側に増築していったため新旧が絶妙なバランスで共存する増築の妙を見ることが出来ます。特に戦後の増築の全てを村野藤吾が手がけたことが一体不可分な姿を生み出したと言えるでしょう。村野は、高橋による増築が地下まで完成していたこともあり、柱の位置や階高、空調設備の考え方を受け継ぎながら、外観のデザイン面では村野流の新しい形を打ち出しました。7、8階は当初の重厚な形態を南から東面まで延長する一方、2～6階はガラスブロックを大胆に使って明るくモダンに仕上げます。これは、採光という法的な条件を手がかりに、日本生命館の重厚なデザインの継承を希望する日本生命と、モダンデザインを希望した高島屋の相反する要望にこたえ、また高橋貞太郎の設計に敬意を払った結果生まれたものです。

屋上中央北側にある曲線の屋根が美しい塔屋は、戦後屋上の人気者だった小象の高子をモチーフにしたといわれています。



村野藤吾の設計による東南外観*

階段も比較してみると、石をふんだんに使った重厚な高橋のデザインに対して、村野の階段手摺は鉄、真鍮、ステンレスを組み合わせた瀟洒なもので、それも増築の時期により豊かなバリエーションを見ることが出来ます。

高島屋東京店を彩る芸術作品

南側外館中央部のバルコニーを飾る塑像は、地下鉄駅（日本橋駅にもあります）のマーキュリー像の作者としても知られる屋外彫刻のパイオニア、笠置季男の作品です。屋上洋風庭園の噴水塔は、小森忍。建物中央の南向きに位置する12,13号エレベータ1階扉の絵は東郷青児によるものです。



笠置季男による塑像*



東郷青児デザインのエレベータ扉*

生き続ける文化財

このように高島屋東京店は、創建時の姿をよく残しているだけでなく、村野による増築の魅力も多く見ることが出来ます。また近年の外壁の修繕や耐震補強でもこのような魅力を残すことに配慮した工事が行われました。

日本橋から中央通りをぶらぶら歩き、季節を感じさせるショーウィンドウを眺めながら、西正面入口から入ると、華やかな吹き抜けがお出迎え。奥のエレベータに乗って、お目当ての催し物会場へ。屋上庭園で一休みのあとは、百貨店の名のごとく様々な商品を眺め、最後は1階から大階段を下りて、地下で夕飯に逸品を加え、地下鉄で家路につく。そんな風に生活の一部に出来るのも、生きている文化財の楽しみ方なのかもしれません。

志岐祐一（関東学院大学非常勤講師／日東設計事務所）

* 川澄建築写真事務所：撮影
** 株式会社高島屋：提供
*** 志岐祐一：撮影

問い合わせ先

〒103-8265 東京都中央区日本橋2-4-1
日本橋高島屋 TEL：03-3211-4111(代)

～東京を旅しよう。～ 東京文化財ウィーク2009が始まります！

文化財ウィークとは

東京文化財ウィークは、国の「文化財保護強調週間」に合わせて、都内各地にある文化財を一斉に公開するとともに、文化財に関連した企画事業もこの時期に集中的に実施しようとするものです。

今年は10月31日(土)から11月8日(日)まで、国や都の指定文化財を中心とした都内の文化財を一斉に公開する公開事業を行います。現地ではこの期間に限って、ポストカード型の解説カードも無料で配布しています。(公開日は東京文化財ウィークのガイドで御確認の上お出かけください。)

10月1日(木)から11月30日(月)までは、文化財に関連した「文化財めぐり」や「現地鑑賞会・実演」などの企画事業を集中的に行います。

文化財ウィークガイドについて

東京文化財ウィークのガイド(冊子)を発行しました。ガイドには、文化財ウィークに参加する公開文化財、企画事業の情報が全て掲載されています。

都庁内の東京観光情報センターや、区市町村教育委員会の文化財担当の窓口、区市町村立郷土博物館を中心に無料で配布しています。



ガイドステーション

「文化財ウィークってなんだろう?」「ガイドが欲しい。」など、皆様のご要望を伺う情報拠点として、区市町村立の郷土博物館を中心にガイドステーションを設置しています。今年度のガイドステーションの設置場所は文化財ウィークガイドに掲載しています。

東京文化財ウィークアンバサダーの御紹介

文化財ウィークをより多くの人に知っていただくため、文化財ウィークをより盛り上げてくださる「東京文化財ウィークアンバサダー」の皆さんを御紹介します。

海老名香葉子さん
エッセイスト



まず、地元の人たちが文化財を悟ることです。そして、大事にし、発信していきましょう。小学生から始めて全ての子供たちが、日本の文化、文化財を学んで欲しいと思っています。江戸の文化は少なくなっているだけに大切にしたい思いでいっぱいです。また、世界の人達にも日本の東京文化を伝えましょう。まだまだ素晴らしいところがたくさんあります。東京は乱立するビルばかりではありません。

苅谷俊介さん
俳優



東京の文化財を訪ねる。それは現代の「心の闇社会」からの脱出です。家族みんなで、学校の先生と一緒に、若い人のグループで、恋人と二人で…。きっと日本人の繊細で豊かな心を掴み取ることができます。その時、現代社会のヘドロにまみれていたあなたの感性は未来に向かって輝きはじめるでしょう。文化財には不思議な力がありますよ。

あきら
松本晟さん
漫画家



人の命と歴史の時間の中で、想いをかけた文物、文化的芸術、構造物が生まれ世を越えて受け継がれ現代に生き続けている。それが掛け替えのない先人の「心」だ。

それを、護り、又、後世に伝え遺して行くのが、私達の責務だと思う。

破壊や遺棄が起こらないよう、私達も心に刻んで、これを護り抜きたいと思います。

見学にあたってのお願い！

文化財は、私たちの大切な宝物です。そして後世に受け継いでいかなければなりません。文化財を見学するときはマナーを守ってご鑑賞ください。ガイドには各文化財の施設情報が載っています。撮影禁止の場所もありますので、ガイドや現地の指示に従ってください。

東京文化財ウィーク2008表彰事業

東京文化財ウィークでは、文化財保護の観点から、特に注目される公開・企画事業について東京都知事賞、東京都教育委員会賞を設けて、表彰しています。

2008年度の東京都知事賞には、港区教育委員会の港区文化財保護条例施行30周年特別記念展「悠久の旅人Ⅲ」ならびに宗教法人妙定院「妙定院熊野堂・上土蔵特別公開」が選ばれました。

妙定院熊野堂・上土蔵特別公開は、国の登録有形文化財（建造物）である熊野堂・上土蔵を活用

し、蔵という閉ざされた空間を照明や人の視点に合わせた展示ケースによって各文化財に光を当て、寺院の展示として斬新な手法を取り入れている点が評価されました。また、同時開催された港区教育委員会の特別展の第二会場としても活用され、行政と寺院が協力関係を構築した点も併せて評価されました。

東京都教育委員会賞には特別公開「小机家住宅一棟」が選ばれました。小机家住宅は、明治初期における文明開化の和洋折衷様式の生活がうかがえる住居として現在も使用されています。個人宅でありながら、その居住空間を公開して下さるという、ご当主の文化財に対する公共性の理解と、今後とも保存活用していこうという熱意の下に特別公開が実現したものであるという点が評価されました。

問い合わせ先

東京都教育庁地域教育支援部管理課文化財保護係
電話 03-5320-6862

文化財ウィーク 2008受賞事業



港区文化財保護条例施行30周年記念特別展
「悠久の旅人Ⅲ」(港区教育委員会)



「妙定院熊野堂・上土蔵特別公開」
(宗教法人妙定院)



「妙定院熊野堂・上土蔵特別公開」の様子



特別公開「小机家住宅一棟」



「小机家住宅一棟」公開の様子

箱根ヶ崎獅子舞と御嶽神社本殿

交通及び案内図

御嶽神社本殿（瑞穂町大字石畑1848番地）

JR八高線「箱根ヶ崎」駅から徒歩20分又はバス利用の場合は、立川バスで立川駅北口行、昭島駅北口で「瑞穂第一小学校」下車徒歩5分

立川バスで立川駅北口、昭島駅北口から「瑞穂第一小学校」下車徒歩5分

都営バスで青梅車庫前、柳沢駅前、小平駅前、東大和駅前行きで「瑞穂第一小学校前」下車徒歩5分



箱根ヶ崎獅子舞（町指定無形民俗文化財）

箱根ヶ崎の獅子舞の由来はつまびらかではありませんが、古来より伝わる由緒ある芸能で、江戸時代の初期にはじまったものといわれています。安政4年(1857)には獅子頭を再建した記録が残っています。

明治26年(1893)の、山田範録(半六)の『再生記』によれば、江戸時代には盛んでしたが、元治元年(1864)幕末の世情騒然たる時期に一時中止となり、明治の半ばに「神事祭礼は古式により執行せよ」との布告があった時、当番の高水仁兵衛、山田半六、猪俣戸右衛門等が発起人となって再興について有志にはかり、賛成を得て明治の再生となったと伝えられています。

明治26年10月13日、鎮守の臨時祭礼を執行し獅子舞を奉納し、以来、大正時代にも狭山神社や加藤神社の祭礼に奉納されました。箱根ヶ崎の人々は、獅子舞を奉納して、五穀豊穰や、雨乞い、家内安全等を祈願したのです。

昭和44年(1969)、箱根ヶ崎の古老より、獅子舞の保存と後継者問題について強い要望が出されました。そこで当時の狭山神社総代及び箱根ヶ崎財産区管理会長が中心となり、町内各層に呼びかけて協議を重ね後援会を組織し、保存会が結成されました。

現在は、秋(10~11月)の産業祭や町民文化祭で披露されています。



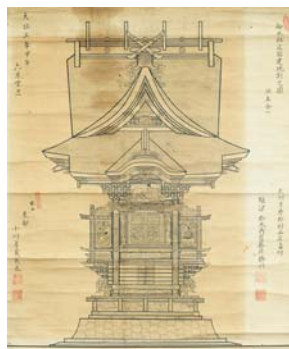
昭和23年頃

御嶽神社本殿（町指定有形文化財）

この本殿は、一間社、入母屋造、正面は、千鳥破風付、こけら葺向拝軒、唐破風付、総檜材で、彫刻のみごとさで知られています。柱真々0.78m、総高約3mの小社殿、軸部は、亀腹の上に建ち、丸桁（極木を支える横材）から下は斗拱を除き、壁面はもちろん勾欄の手摺から土台に至るまで、彫刻が施されています。

棟札によって、この本殿は、旧石畑村下郷の棟梁、鈴木広宝(内匠)が天保12年(1841)2月に着工、弘化2年(1845)4月に完成していることがわかります。なお、資料として、次の記銘物があります。

- ① 享保八年九月奉納 木銚
- ② 弘化二年四月再建 棟札
- ③ 明治元年十一月 社名変更に関する木札
- ④ 御嶽神社御本社 正面建地割之図、妻建地割之図 各一葉



正面建地割之図



本殿

問い合わせ先

瑞穂町教育委員会教育部郷土資料館
電話 042-568-0634 (FAX共)

瑞穂町ホームページ <http://www.town.mizuho.tokyo.jp/>

新島村の大踊

交通（空路、海路が利用出来ます）

東海汽船

東京(竹芝棧橋) ☎ 03-5472-9999

横浜(大棧橋) ☎ 045-212-3131

下田 ☎ 0558-22-2626

新中央航空

調布飛行場 ☎ 0422-31-4191

新島空港 ☎ 04992-5-0288



1 新島の大踊

新島村は、東京の南方海上約150kmに位置する新島本島中央部の本村、北部の若郷、新島本島から約4km離れた式根島の三つの集落があります。

新島の大踊は、新島本島の本村と若郷に伝承される小歌踊で、本村では8月15日の夕方から長栄寺の境内で、若郷では8月14日の晩に妙蓮寺の境内で踊られ、盆の供養踊りとして伝承されて来たものと思われます。

2 大踊はいつごろの芸能か

説によれば、室町時代後期に京の方から流布した風流踊りであるとされ、平成20年の盆祭の大踊は、本村では「役所入踊」「お福の踊」「伊勢踊」、若郷では「青が丸」「備前踊」「伊勢踊」が踊られました。

これらの踊りの特徴は恋歌であり、スローテンポでゆったりとしています。いつごろ島へ入って来たかは定かではありませんが、三島勘左衛門が著した「伊豆七島風土細覧」には、寛政のころの新島の大踊の様子が詳しく記されています。

「14・15の両日は島中の若者ども御役所の大庭に集まり大踊とて一様に菅笠を冠り、顔を隠して住吉踊のごとく手に扇子を持って謳ひつれて踊る。古代の規式にて16段のふし事あるよしなれども面白き事は曾てなし。此隙間に小踊とて12、13歳なる童共30人ばかり編笠着て踊る。是は少面白き方、唱歌も手振りも遙かにまされり。」

昭和初期までの盆祭は島人全体がかかわる行事として行われてきました。



本村の大踊



若郷の大踊

行事に参加する踊衆は村の代表として、旧7月1日から祭りに向けて毎晩遅くまで厳しい稽古に励んだといひます。

昭和33年、東京都無形民俗文化財として指定を受け、平成17年には国の重要無形民俗文化財に指定されました。

3 大踊の小道具（服装と持ち物）

紫色（若郷は赤色）のカバと呼ぶ布を垂らした妻折笠をかぶり、藍色（若郷は黒）絹の着流しに角帯をしめ、さらに細かい萌黄の真田を巻きます。腰に印籠をさげ、背から長い下げ緒を垂れ、白足袋はだして踊ります。

4 祭礼の設備

大踊の行列には傘ぼうろく、鎌、提灯などが加わります。会場には高灯籠が吊るされ、暮れ六つの鐘を合図に灯を入れます。

傘ぼうろく：大きな傘の周囲にカバと呼ばれる幕を張り、傘の柄には布地を細かく切ったものや、鏡、ハサミ、鈴、猿の形をした小さな人形、女性の髪などを麻で結んで吊るします。麻の一部を白い紙で巻き、紙には寄進者の姓名を書き付けます。
鎌：本村のものには縄を巻きますが、若郷では巻きません。



左から 傘ぼうろく 提灯 鎌

新島村の大踊は長い中断を経て復活した経緯があり、今後の課題も多いのが実情です。特に歌の伝承者については、若郷では現在2名の音頭師匠が歌を担当していますが、高齢化していて音頭の後継者の育成が大きな課題となっています。

問い合わせ先

東京都新島村教育委員会 ☎ 04992-5-0203

新島村博物館 ☎ 04992-5-7070

世界遺産なるか？ 国立西洋美術館本館

今年6月下旬、「国立西洋美術館 世界遺産登録先送り」などの新聞見出しが躍りました。国立西洋美術館本館が、ル・コルビュジエの作品であることから世界遺産に推薦されていたとご存知でしたら、かなり通な方です。

ここでは、重要文化財である「国立西洋美術館本館」が「ル・コルビュジエの建築と都市計画」の世界遺産推薦物件の一つとして審議された経緯についてご説明しましょう。

＜ル・コルビュジエの国立西洋美術館＞

そもそもの話は国立西洋美術館の誕生にまで遡ります。第2次世界大戦中、パリ在住の松方幸次郎氏が所有していた印象派の絵画等のコレクションをフランス政府が押収し、戦後、コレクションを公共の美術館で一括して保管、展示することを条件に日本に返還されることになりました。この返還に伴う美術館は、上野公園の一角に建設されることになり、その設計は、フランス政府の紹介でル・コルビュジエに託されます。

ル・コルビュジエ(1887-1965)はスイスに生まれ、本名シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ＝グリといい、伝統から切り離された合理性をモットーとしたモダニズム建築の提唱者です。1925年パリ万国博覧会でモダニズム建築のエスプリ・ヌーヴォー館を担当して名声を博し、後にフランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエとともに近代建築の三大巨匠と呼ばれます。

フランスを中心に活躍していたル・コルビュジエが基本設計を担当し、実施設計は、弟子の前川國男・坂倉準三・吉阪隆正が担当し、国立西洋美術館が建設されたのです。

＜世界遺産登録に向けて＞

平成18年3月のフランスからの世界遺産登録の共同推薦要請に対し、日本政府は世界遺産登録の前提となる国内法による保護措置として重要文化財に指定されていないことを理由に一旦は断ったのですが、平成19年2月にフランスから再要請を受け、日本政府は登録推薦に向けて準備を進めることを決断します。

同年12月に国立西洋美術館本館が重要文化財に指定され、翌年2月にフランス、スイス、ベルギー、ドイツ、アルゼンチン、日本の6か国22物件で「ル・コルビュジエの建築と都市計画」の推薦書を

共同で作成し、世界遺産委員会の事務局であるユネスコ世界遺産センターへ提出しました。

平成20年10月に世界遺産委員会から依頼を受けたICOMOS(国際記念物遺跡会議)の調査員が来日、推薦物件の価値や保護・保存状態、今後の保全・保存管理計画などについて現地調査を受けました。

平成21年5月のICOMOS(国際記念物遺跡会議)の評価結果と勧告では、「登録延期」となりましたが、6月のスペイン・セビリアにて開催された世界遺産委員会では、「情報照会」とし、追加情報の提出を求めた上で次回以降に審議を回す決議がなされました。

「ル・コルビュジエの建築と都市計画」は、ル・コルビュジエの近代建築のムーブメントが世界へ拡大し、伝播していったことを示す上で、重要な遺産です。今までの日本の世界遺産とは異なり、6か国共同で推薦を取りまとめ、国際的な連携協力の中で人類の遺産として保護されていくこととなります。私たちは国際協調の観点でも重要な役割を担うことになることでしょう。



©国立西洋美術館

編集担当から

今号より6ページから8ページに増え、内容も盛り沢山となりました。巻頭で国の重要文化財に指定された高島屋東京店の特集を、中頁で今年12年目を迎える東京文化財ウィーク2009の特集を組んでいます。秋のお出かけに、身近にある文化財めぐりを楽しんでみてはいかがでしょうか。

平成21年9月30日

発行 東京都教育庁地域教育支援部管理課
〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話 03(5320)6862